

田間を秋田市金足の秋田県立博物館まで片道二時間半の旅だったが、博物館では全館の職員を挙げての歓迎を受けた。

最初に同館教育普及班の石井志徳学芸主事から館の概況について説明を受けた後、館内を見学。秋田の歴史と自然について、学芸員の解説を受けて秋田の豊かさを実感。昼食後、アイリスの会とミュージアムのボランティア活動について意見交換をした。

話し合いの中で、両方の会員たちが互いに岩手、秋田両県の近さと親しみを実感したようす。

翌日、秋田県立博物館ボランティア、アイリスの会の蝦名萬智子会長から佐藤会長宛にEメールが届き、今後とも交流を深めていきたいとの思いが伝えられた。

(向井田)



ガイドの意見発表風景

市民交流事業に三七〇人 キャンパスツアー・上田の杜音楽会

岩大構内の桜の花を訪ねて歩き、春の音楽を楽しむ「構内桜めぐり&上田の杜・春の音楽会」は五月二日に開催された。五月晴れの桜めぐりには三七〇人余りの市民が参加して、多種多様なキャンパスめぐりを楽しんだ。

また、その後の音楽会は農業教育資



満開のさくらを楽しむ

一日を心ゆくまで楽しんだ。

岩大キャンパスの散策と音楽会というこのイベントは昨春秋に次いで二度目。市民を岩大キャンパスに招待してのツアーとしては四度目。

新年度が始まると同時に準備を進めてきた会員たちの心配は、五月二日まで桜が散らずに残っていてくれるかどうか、ということ。しかし、準備を進めている中に、何度か春の足踏みのような日があつて、同日の開催が最適になった。

音楽会は午後二時半の開演の前に二百人の来館者でいっぱいになり、国の重要文化財に「もしものことがあつては」と入場制限するほどの盛況。

松園シルバーダックスは、文字通り松園地区に住む六十歳以上の男性で三年前に結成した合唱団。誰もが知っている「箱根八里」「水戸黄門」「村祭り」などを披露し、年齢を感じさせない美声を響かせて聴衆を魅了した。

北の街ナツメロ合奏団は教員OBらで緑ヶ丘地区を中心にマンドリンや和音、ギターなどさまざまな楽器で編成した異色のグループ。各地の施設で演

料館二階講堂で開かれた。会場を埋め尽くした市民は松園シルバーダックス、北の街ナツメロ合奏団の演奏に酔いしれ、春の

奏して好評を博している、この日も女性のソロを交えたナツメロがレトロな会場に快く響いた。(向井田・村谷)



松園シルバーダックス



北の街ナツメロ合奏団

第六回研修会・岡田秀二教授 住田町の林業を解説

岩手大学ミュージアム解説ボランティアの会の第六回研修会が二〇〇五年十二月三日、岩大メディアセンター一階会議室で開かれた。農学部岡田秀二教授から住田町の林業経営について、産学官の連携による地域興しの歩みを聞いた。

住田町は二〇〇三年秋に岩大ミュージアムが開館した際には町民がミュージアムに来て、気仙杉の木材を提供したうえ、気仙大工の技術も提供してコーナー造りの施工も担当し、協力した。そこまでに至る間、岩手大学と住田町当局は、地元の山林所有者や林業関係者と協議して、町民が出稼ぎの収入に頼らなくても地元の山林資源で生活できる場をつくる事業を計画し、実行してきた。



解説する岡田教授

山系地域の山間、中山間地域でもこれをモデルケースとして地域興しに活用できる可能性が十分にあるという。

住田町は町面積の約九三%が山林でしめられ、かつては気仙杉とそれに育てられた気仙大工の腕が全国各地で求められたが、戦後の経済高度成長期には、気仙杉は輸入材の圧力に押され、気仙大工は建築工法の変化などで首都圏の工事現場などへの出稼ぎでしか就労の場がない不安定な地位に立たされた。

この状況を打開するために地元産の気仙杉を現在のニーズに合った付加価値の高いものに加工する方法とし、製材、集成材、プレカット加工からなる木工団地を地元で造り、町民に男女の差なく就労の場を与え、かつての高い評価を取り戻した。この間の取組みはミュージアムの住田町の林業コーナーに備え付けの資料からもうかがえる。この事例から岡田教授はこれからの地域興しは産学官の連携のほかに地域間連携(村・むら連携)の取組みも必要であるという。(向井田)